

科目名・単位数	簿記Ⅰ 2単位	科目分類	財務会計系	基本科目
配当年次	1年次・春学期・昼・夜	担当教員	はまもと あきら 濱本 明	
履修形態	選択必修			
授業概要	<p>目的：簿記上級レベルの計算処理技術の理解</p> <p>中級レベルまでの複式簿記の基礎的理解を前提に、日本における経済社会の中心的役割を担っている株式会社を対象とした簿記を学習する。</p> <p>一般的に、簿記は学習項目の範囲により初級、中級、上級に分けられることが多いが、簿記Ⅰでは、株式会社の簿記処理のうち上級レベルの簿記処理を体系的に理解することを目標に解説を行う。したがって、本講義では、会計理論よりも計算処理技術に焦点を当てて講義を進行する。</p>			
到達目標	正確な計算処理の技術の修得			
授業方法	教材および補助資料を使用してオンライン授業（オンデマンド型）により進行する。授業においては講義が中心となるが毎回の課題とフィードバック、メール等による質疑応答を通じて、双方向性を確保する。			
事前・事後学習	各回の範囲の予習（120分）、問題演習（120分）			
成績評価の方法	レポートを重視する（80%）とともに、講義への参加状況等（20%）を含め総合的に評価する。			
フィードバックの方法	講義内における解説、質疑応答、確認テストおよびその解説を通して行う			
履修上の注意	中級程度（日商簿記検定2級程度）の簿記知識を有していること。			
授 業 計 画				
第1回	<p><u>会計の意義と会計公準</u></p> <p>簿記は、会計情報を作成する上でのデータを体系的に集計している意味において会計情報作成のためのデータベースとしての機能を果たしていると言える。基礎的な理解として会計の役割とその基礎的前提となる会計公準について扱う。</p>			
第2回	<p><u>資産会計①</u></p> <p>資産の分類および貸借対照表における資産の意義について検討を行う。一般に行われている流動・固定区分に加えて、資産を貨幣性と費用性という視点から分類を行う事で損益計算との結びつきから資産の意義についての理解を深める。</p>			
第3回	<p><u>資産会計②</u></p> <p>無形固定資産および繰延資産の資産性について動態論的思考からその意義を確認し、損益計算との関わりを検討する。また、資産評価について資産の性質との関連からその意義を考察し、簿記記録との関連を検討する。</p>			
第4回	<p><u>負債会計①</u></p> <p>貸借対照表における負債の意義について検討を行う。とりわけ、引当金のいぎについて、損益計算との関わりからその意義を検討する。また、負債の評価における償却原価法の考え方について実践的に検討を行う。</p>			
第5回	<p><u>負債会計②</u></p> <p>固定資産の取得に伴い計上する資産除去債務について検討を行う。資産除去債務の意義について引当金との相違や資産負債アプローチ的思考との関連について取扱い、その負債性および資産性について簿記記録の立場から検討を行う。</p>			
第6回	<p><u>純資産会計①</u></p> <p>純資産の部の構成要素について検討を行い、資本金組入れや準備金の積立額についての制度の体系について実践的に検討を行う。また、株主資本の意義について払込資本と稼得資本という視点から検討を行う。</p>			

第7回	<p><u>純資産会計②</u> 剰余金の分配可能額計算についての法制度を確認し、具体的な計算を行う。また、株主資本以外の構成要素である評価換算差額や新株予約権の意義について検討を行う事で純資産と株主資本の関係について理解を深める。</p>
第8回	<p><u>会計上の変更および誤謬の訂正</u> 会計方針の変更、表示方法の変更および見積りの変更に関わる簿記処理について検討を行う。プロスペクティブ方式とキャッチアップ方式の意義の相違について検討を行い、財務諸表の修正がもたらす影響について考察を行う。</p>
第9回	<p><u>損益会計①</u> 収益認識における実現（リスクからの解放）という考え方について、検討を行う。その上で、特殊商品売買における損益認識や請負工事契約における収益の認識について実現概念との関わりから検討を行い、簿記処理を学ぶ。</p>
第10回	<p><u>損益会計②</u> 利益計算における包括利益と純利益の関係について検討を行う。両者の主たる相違は、資産負債の時価評価差額を収益認識との関わりにおいてどのように捉えるかという点にある。その点を確認したうえで、簿記処理の意義について検討する。</p>
第11回	<p><u>税効果会計①</u> 会計における当期純利益と法人税等における課税所得の計算の差について整理を行い、税効果会計の意義について概観する。純利益と課税所得の差額が当期純利益の計算に与える影響について検討を行い、必要な簿記処理を整理する。</p>
第12回	<p><u>税効果会計②</u> 税効果会計における貸借対照表資産負債法の考え方について検討を行い、税効果会計において法人税等調整を行う場合と会計における資産・負債の相違を直接調整する場合の相違を整理し、簿記処理の内容を確認する。</p>
第13回	<p><u>税効果会計③</u> 税効果会計の具体的な適用例について個別に簿記処理を確認していく、とりわけ、金融商品の会計に関わる処理、損金算入限度額に関わる法人税等調整額を用いる処理、圧縮記帳における積立金処理における税効果会計の適用等を扱う。</p>
第14回	<p><u>財務諸表①</u> 主要な財務諸表である貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書および株主資本等変動計算書の関係について取り扱う。また、財務諸表における純利益と包括利益の関係について、評価差額の取扱いを中心に検討を行う。</p>
第15回	<p><u>財務諸表②</u> 財務諸表の開示制度について検討を行い、キャッシュフロー計算書および株主資本等変動計算書の具体的な作成方法について扱う。具体的な設例を用いて財務諸表の作成についての簿記処理について演習を通して確認を行う。</p>
テキスト	渡部裕亘、片山覚、北村敬子、編著『検定 簿記ワークブック 1級 商業簿記 会計学 上巻』中央経済社※必ず最新版を用意すること
参考図書	授業内で指示する。